

否み、見捨てる者を尚も 愛し信頼して下さるイエス様

マルコ福音書14章43～52節
2023年3月19日
松田 基子 師

神様は人間を、共に愛を築き合う存在として、
『ご自身を愛し、敬い、聴き従う事によって、
真の愛の世界を築くために』

人間を創造されました。しかし、人間は神様に
敵対する誘惑者の言葉に心惹かれて、神様の
言葉を疑い、神様に叛いてしまいました。人間の
祖は、神様に叛いたことが、どれ程大きな罪
であるかが分かりませんでした。それは人間の
世界に、

『罪が入り込んで来て、罪は罪を生み、
罪が蔓延して行く世界が続く』
と言う事です。人間は神様に結ばれるために
造られました。

それなのに、神様に叛いたと言うことは、誘惑
を受けたにしろ、自分で神様に敵対する勢力で
ある、サタンと手を結んでしまったのです。
人間はそのように、

『神様に結ばれるか、神様に敵対する
サタンに結ばれるのかどちらかなのです。』
サタンに捕らえられてしまった人類は、サタンと
運命を共にする事になりました。それは遂には、
神様に滅ぼされ、永遠の滅びに向かわなければ
成りません。サタンに支配され、永遠の滅び
に引きずりこまれて行く事が、

『人間には想像する事が出来ない、
絶望と暗黒、悲惨なものである』
事を知っておられるのは神様だけでした。

神様は愛を込めて、愛を築いて行く存在とし
て、人間に命と使命を与えて、この世に送り出さ
れたのです。神様は、その人間がサタンに結
ばれて 永遠の滅びに引きずり込まれて行く事
に、非常な悲しみを覚えられました。神様は、
『何としても、人間をサタンの手から、
救わなければ成らない』
とお考えになりました。その人類への悲しみは、

三位一体であられる神の御子も、父なる神様と
一つ思いであられました。

そこで、父なる神様は、
『御子を人の子として、地上に誕生させ、
人類の罪の贖い主となさいました。』

そのお方がイエス様です。神様は人類を永遠
の滅びから救うために、御子イエス様をこの世に
お与えになったにも拘わらず、サタンに結ばれ
ながら、サタンに支配されている自覚を持たない
で、自己中心、人間中心に生きている人類は、
イエス様にことごとく反対し、イエス様を抹殺する
事に全勢力を注ぎ込みました。サタンが神様
に対抗するために、一番用い易いのはこの世の
権力者達です。

権力者達は、
『自分達が、一番偉いのだ』
と思い込んで、神の座に坐り、人々を自分達の
思い通りに、従わせることしか考えていません。
その自我、自己中心は、自分達に反対する者、
自分の地位を脅かす者、気に入らない者は、権
力によって抹殺するのです。イエス様時代の
イスラエルの宗教指導者達は、ローマの支配下
にあったとは言え、議会を掌握する国家権力者
達でした。その彼らにとって、イエス様程、腹立
たい存在はいませんでした。

「自分達こそ、神様に選ばれた選民として、
律法社会を守り抜いているのだ。律法を
守れない様な者は、排除して、自分達に
居心地が良い社会が出来ているのに、
あのイエスは、
『社会がダメだと排除している者達』
に、敢えて近付き、彼らに、
『神に愛されている』
等と教えている。人々は皆、イエスに心を向
け、イエスを称賛している。これでは律法社
会が脅かされる。それに無知な群衆は、
あんな男にメシアを期待して、何と言う事だ。
あの様な危険人物は極刑にして神様から呪
われている事を証明せねば成らない。」
と、彼らは何としても、イエス様を神様に呪われ
た存在として、異邦人の手で十字架に架けるの

だと意気込んでいました。

その事が、マルコ14章1節、2節に、記されています。

「さて、過越祭と徐酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。彼らは、『民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう』と言っていた」

とあります。彼らは国の宗教、及び政治の指導者として、立てられながら、神様にいっさい聴こうとせず、自分達の権力保持だけのために生きていました。

サタンはその心を巧みに利用し、神様に叛かせていました。人間の罪深さ、それは、自分が滅ぶべき運命にある事が分からず、自分を救ってくださる神様の計画に、真っ向から逆らうことです。権力者達は、民衆を軽蔑していましたが、彼らが群衆となった時の力を恐れていました。時は過越祭を前にして、エルサレムは巡礼者に溢れていました。

『その様な時にイエスを捕らえるのは群衆が決起するかもわからない。だから、祭りが終わってからにしよう』と決めたのです。

しかし、事は彼らの計画ではなく、神様の御計画で進んで行きます。神様は彼らの計画を全てご存知でした。彼らは憎しみから、イエスを抹殺しないではいられませんでした。神様の計画は、人類の罪を贖わせることにありました。人間の罪深さは、造り主である神様に対して、神様のものである、自分に貸し与えられた命と人生を罪に汚してしまった責任を負っていると同時にサタンに結ばれて罪の奴隷となっているのです。

この様な罪深い人間が、再び神様に結ばれるためには、全人類の価値に優る神の子の命で、罪の奴隷から贖われ、神の子の執り成しで、神

様からの赦しを与えられなければなりません。

その為に神の御子のイエス様は、『世の罪を取り除く、神の小羊として、十字架に架かって犠牲の供え物とならなければならなかった』

のです。権力者達の計画、サタンの思惑を越えて、神様の計画は進められました。しかし、そこには、サタンの必死の抵抗、反撃がありました。何と権力者達の手先となって、イエス様の捕縛を買って出たのは、イエス様が信頼して、御自分の弟子に導かれた、12弟子の一人、イスカリオテのユダでありました。その一番の原因は、

『彼がイエス様から、目を離し、イエス様に対する信頼を失ってしまった事です。』

彼は愚かにも、僅かなお金で、救い主を敵対者に売ってしまいました。罪を犯している間は、自分の犯している罪の重さが分かりません。彼はこの時、イエス様を引き渡せる時と、場所のみ心を奪われていました。イエス様はそのユダの思いと行動をご存知でした。イエス様はユダを排除することなく、弟子たちと最後の晩餐の席に着かれました。その席上で、イエス様は、ご自身がこれから受ける十字架の死の意味を示されました。パンを取り、

「取りなさい。これはわたしの体である。また、杯を取り、これは多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」と言われました。

イエス様は、『ご自身の十字架の死によって救いが成就する』

と言う事をお示しになりました。しかし、弟子たちは、何のことかまだ分かっていませんでした。食事の後、ユダは自分の目的行動へ向かいました。一方、イエス様は、ユダの行動を知りながら、11人の弟子と共に、何時もの通り、オリブ山へ向かわれました。イエス様はその時、14章27節で、

「あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。』

すると、羊は散ってしまう』
と書いてあるからだ」

と弟子たちに言われました。イエス様は神様の御計画の針が動き始めた事を知っておられました。イエス様はユダの裏切りだけでなく、他の弟子たちも、御自分を捨てて逃げ去る事をご存知でした。

そのイエス様の言葉に対してペトロは、
「たとえ、みんながつまずいても、
わたしはつまずきません」

と大見得を切りました。するとイエス様は、
「はっきり言うておくが、あなたは、
今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度
わたしのことを知らないと言うだろう」

と言われました。そこでペトロは31節に、
「力を込めて言い張った。
『たとえ、御一緒に死なねばならなく
なっても、あなたのことを知らない
などとは決して申しません。』

皆の者も同じように言った」

とあります。

確かにこの時、ペトロも他の弟子たちも、
『イエス様のためなら、死んでも良い
と言う気持はあったでしょう。』

しかし、人間が如何に弱い存在であるかは、
すぐに明らかにされる事になるのです。
イエス様はユダの行動をご存知でありながら、
彼らの奸計(かんけい:わるだくみ)から逃げる事をな
さらず、何時もの祈りの場所である、ゲツセマネ
の園にやって来られました。

イエス様は迫り来る十字架を前に、父なる神
様に、必死に祈られました。14章36節で、
「アッパ、父よ、(お父さん)あなたは何でも
おできになります。この杯をわたしから
取りのけてください。しかし、わたしが願う
ことではなく、御心に適うことが行われます
ように」

と、必死の祈りを献げられました。イエス様は
祈りを通して、この道以外に、御心の道は無いこ
とを受け取られると、毅然として祈りから立ち上

がられました。その間ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、
3人の側近の弟子たちは、眠り込んでいました。
イエス様はその彼らに向かって、

「あなたがたはまだ眠っている。休んで
いる。もうこれでいい。時が来た。人の子
は罪人たちの手に引き渡される。立て、
行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た」

と言われるや、そこにユダが現れ、祭司長、律法
学者、長老達すなわち権力者集団である議会
が遣わした群衆が、剣や棒を持って現れました。

44節を見ますと、

「『イエスを裏切ろうとしていたユダは、
わたしが接吻するのがその人だ。

捕まえて逃がさないようにつれて行け。』

と、前もって合図を決めていた」

とあります。信頼を失うと言う事が、どれ程の裏
切りになるのか、ユダによく現れています。
イエス様はご自身を裏切ったユダの罪も引き受
けて、ユダの立ち直りを求めて、なおユダを信頼
しておられます。しかし、そのイエス様の愛が、
ユダの不信の為に、彼自身に伝わらないのです。

45節を見ますと、

「ユダはやって来るとすぐに、

イエスに近寄り、

『先生』

と言って接吻した」

のでした。ユダは信頼の表明である接吻の挨
拶をもって、イエス様を十字架へ引き渡してしま
いました。人は自分が罪を犯している間、自分
の罪に気づきません。罪はささやくのです。

『お前のやっている事は

意味がある。正しいのだ。』

ところが、罪を犯してしまうと、

罪はくると向きを変えて、

『お前は何と言う事をしたのだ。

何と言う罪人だ』

と責め立てるのです。ユダも悲しいかな、イエス
様から目を離し、イエス様への信頼を失ったため
に罪の誘惑に負けて、罪に責められ、生きられ
なくなってしまうのです。

夜の闇間に、ユダのイエス様への接吻を合図に、人々はイエス様を捕らえました。イエス様は彼らに向かって、

「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである」

と言われました。

イエス様は毅然として、彼らが闇の業を行っていることを指摘されました。イエス様は毎日、神殿の境内で、神様の御心を教えておられ、大勢の人々がイエス様の言葉に耳を傾けていました。何か不正があるなら、その時に堂々と、皆のいるところで、捕らえるべきでした。悪巧みだから、夜に、しかも不信からの過剰防衛で、剣や棒を持って押しかけてきたのです。彼らは権力者の片棒を担いで、罪の奴隷となって動いているだけでした。

しかし、神様の側からは、深い意味がありました。

「聖書の言葉が実現するためである」

と、イエス様は神様の人類救済のための永い歴史を通して与えられた約束が、ご自身によって、それも

「十字架によって、実現する時がきた」

と言っておられます。イエス様は父なる神様への絶対的信頼に立って、彼らに捕らえられ、人類を贖うために、十字架への道を歩み始められました。

ところがあの、大言壮語したペトロを初め、11人の弟子たちは、一斉に蜘蛛の子を散らすようにイエス様を見捨てて逃げ去って行きました。一緒に居た、一人の若者も、人々が捕らえようとすると、着ていた亜麻布を捨てて、裸で逃げてしまいました。彼の名は記されていませんが、それは私たちの姿です。私達の罪深さは、わたしの生も死も、その全存在を救って下さる救い主に対して、絶対的信頼を貫いて、イエス

様の許に止まる事が出来ない弱さを持っていることです。

でも、そんな弟子たち、私達をイエス様は御見捨てになるのでしょうか。イエス様はペトロと弟子たちが、ご自身を否み、見捨てて逃げ去る事を予告されると同時に、14章28節で、

「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」

と言われました。それは再会を約束して下さったのです。そして、復活されたイエス様は、ガリラヤで彼らに再会し、赦しを与え、宣教を委ねられました。私達がどんなに躓き、失敗し、罪を犯しても、私達を、十字架にまで架かって贖って下さったイエス様は、私達を何処までも信頼し、追い求め、出会い、引き戻して下さるのです。私達はそれ程までに、イエス様に愛され、信頼されているのです。この事を信じましょう。そして、どんなことがあっても、イエス様を信頼し続け、目を離さず、従い続けて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

ご自身の愛、イエス様の愛に、心から感謝します。いくたびも主を見捨てた私達を尚も愛し、信頼し、再会して下さるご愛に感謝します。

私達を、如何なる時も主を見詰め、信頼し従って行くことが出来るよう、御聖霊が助け導いて下さい。

愛する方々の上に、この豊かな祝福をお注ぎ下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈り致します。

アーメン。